

子供たちから学んだ真の教育法

私の研究が一応まとまって、初めて、それがマスコミに取り上げられたのは、昭和二十七年であった。今からちょうど四分の一世紀昔のことになる。朝日新聞の東京都下版に、トップ記事、四段抜きで、『石井主事、近く研究成果を発表』という見出しで紹介されたことが、今でも昨日のこのように思い出すことが出来る。

私は、その翌年(昭和二十八年)、指導主事をやめて、それを実践で証明するために、小学校一年生の担任教師になった。初めは数年で済むと思ったこの実践は、昭和四十二年まで、十四年間続いた。

教育は、実際に教育してみて初めて理解できるものが多い。頭の中で良いと思ったことも、実践してみると少しも良くない場合が意外に多い。反対に、つまらぬと思うことが、意外に効果を挙げることがある。ともかく、考えては実践に移し、実践しては考えることが絶対に必要なのである。

真の教育法は、教える子供たちから学ぶものだと思う。私は、十四年間、教え子たちから実に多くのことを教えられた。「漢字がかなよりも覚えやすい」ことをはじめ、私が発見した新しい事実は、結局のところ、皆教え子たちに教えられたものである。

昭和四十二年、子供たちといっしょに運動場を駆け回ることが負担に

感じられるようになった私は、小学校教師の職を退いた。しかし、今でも私の研究所に通って来てくれる子供たちに、必ず毎週二日だけは都合をつけて、子供たちを指導することに励んでいる。

今は、三歳から四歳、五歳という幼児を相手に、漢字教育を試みているのであるが、なかなかおもしろい問題が次から次へと出て来る。論語の素読を始めたが、幼児は音読することに驚くほど興味を持つものであることも教えられた。

この子供たちは、朝起きると、まず、論語を取り出して朗読するそうである。こうしているうちに、文章が頭の中に入ってしまった、近頃は、暗誦している子供もいる。こうなると、どんな文章でも、“文章を覚える”能力が著しく高まることも最近わかった。記憶力も、記憶することの経験によって向上するのである。

また、素読だけでなく、子供なりに内容を理解させることに努力しているが、これも子供なりに理解できるものであることもわかった。実生活の中に、この言葉を生かして使うので、親がびっくりすることがあるそうである。

幼児の可能性の大きいことは、今は知らぬ者はないと言ってもよからう。しかし、どれほど大きいかは、そしてそれがどこまで伸びるのかは、だれもわからない。こういう幼児と、毎日ではないが、接していただけることは楽しいものである。死ぬまで続けていきたいものである。